敷へ案内にて通し茶多葉粉盆俥端に取繕ひ差出良暫くして宗羽出たるに其容体小袖重ねに丸くけ帶格子縞とやらんの廣袖の羽織紫の縮り頭巾にて十五六歳の女子左右に從へ頭巾は座敷の出口にて取る如く千萬行作にありけるとなり殊に旅人も相應の者と聞て應對終り其後頼の品も夫々出來けると知斯人品故細工も彌名譽廣まりけるとなり　奥富士物語

（津輕藩舊記傳類）

之は津輕での話らしいから、まだ六十代の時と見ゐるが（玄圭院の隱居後隨つて江戸に歸つた事から推して）、其の「千萬行作」な樣子、殊に十五六歳の女子を左右に侍らせた氣の若さに、なほ二十年後迄も彼れ獨有の絢爛たる色彩の藝術を生んだ力が潜むかと思はれる。又一面からは晩年の彼が專ら津輕家御用の製作にのみ沒頭して、容易に市井の需めに應じなかつた事も之によつて窺はれる。前半世の放浪生活を背景としたる後年の此の境地にこそ、杉の木地に青繪青貝鉛牙陶器の色彩を加へた「笠翁細工」は生れたのであらう。

光琳破笠二家の傳說を通觀すれば、略ぼ二家の閲歷と藝術と、更に其共通の時代をも窺ひ得る感がある。傳說は鍵である。之のみによりて畫人生活の奥所に入る事は出來ないが、一わたり其門戸を窺ふ自由は與へらる。傳說は又畫人傳中の花である。時に何物よりも鮮かに畫人の全面目を語るが、時に人に弄ばれ又人を欺くものは其の色である。

支那歷遊記略（下）

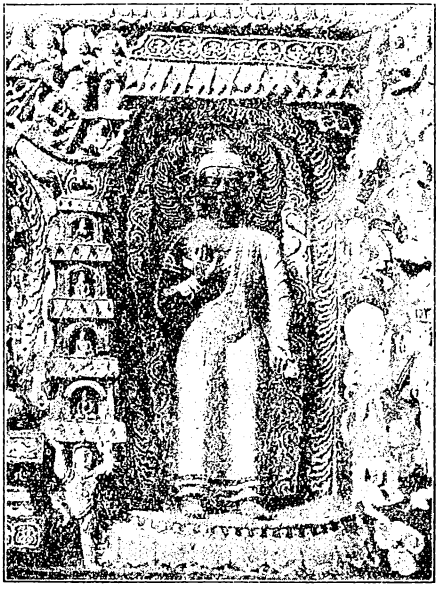
文學博士　松本文三郎

房山から北京に歸つたのが八月廿四日、雨の晴るゝを俟つて同廿七日大同に向つた。途南口に下

車、明陵と居庸關とを見、二十八日大同に着した。彼石佛を以て有名なる雲岡は大同縣を去ること西三十里、武周山にあるのである。抑も大同の石佛なるものは、北魏文成帝の大安年中、曇曜なるものゝ窟龕五所を開いたのを以て始めとする。當時開く所の龕の大なるものは二十餘丈、二千人を容れ、像の高きものは七十尺、或は六十尺といひ、彫飾奇偉一世に冠たりともいはれ、又眞容巨壯世法の希なる所、山堂水殿煙寺相望み、林澗錦鏡綴目眺を新にすとも評せられて居るのを以て見ても、如何に其壯麗雄大であつたかを推測し得らるゝ。佛龕は後世次第に增加せられたものと思ふが、遺憾ながら今日では銘を刻した所は一もないから、元來曇曜の作つたといはるゝものすら、何れであるか確かには判らぬ。後世では石窟十寺とも稱せられ、十ケ寺も出來て居たらしいが、それも今は僅かに石佛古寺と稱するもの一寺の存するのみである。尙ほ其龕の或ものは能く保存せられ、實に壯嚴美妙を極めて居るが、其或ものは殆んど全部破壞せられ、或は田婦の住家となり、或は野人の物置となり、或は牧童の秣處となり、實に無殘な狀態を呈して居る。一体此山は後に說く龍門山と異なり、水成岩より成り、石質極めて脆弱であるから風雨に晒されては自然に壞れ易いのである。で龕の外部に彫造せられた佛像では、今殆んど其全いものを見得ない、唯龕の內或は石窟內部に存するものに於てのみ、僅かに古の形像を認むるのである。が內部にあつても或は人の傷くる所となり、或は其中に起臥する無知野人の爲めに毀らるゝに至つては、實に遺憾の極といはなければならぬ。

大同の石佛は何れも北魏の製作に係るものではあるが、余輩の親しく其實狀を觀察する所によれば、龕によつて此に三種の明かに異なれる形式を

認むるを得るのである、而して其一種は顏面衣服全く印度的であつて、確かに印度人か若くは印度人の指導によつて出來たとしか考へられないものゝ存するのは大に吾人の注意に價することである。第二種は所謂北魏人の理想的体格顏面を顯出したとも思はるゝもの、即ち道宣の唇厚、鼻隆、目長、頤豐かなり丈夫の相を有するものである。此第二の式は龍門詣像には殆んど之を見ることを得ない、而して第一の式は稀れではあるが、支那の彫像に於ては詣處に散見する。第三の式は顏の稍長く、一種特有の服裝を有する像で、是れが龍門其他の北魏佛に最も普通なるものである。で余輩は此第三者を以て大同諸像の中比較的最も後世に成れるものと考へる、是れは其窟の地位からも、服裝からも、其他詣種の點に於て之を證明し得るのである、而して是れが我邦推古式佛像の淵源ともなるのである。が大同佛像に就いては余輩他日別に細論したいと思ふから今は略して置くが、尙ほ一言此に附加し置きたいのは、余輩今回の旅行中、何れの塲所に於ても未だ一度も所謂健陁羅式佛像なるものを發見し得なかつたが、明かに毬多式佛像の影響を受けたと思はるゝものゝ、南北諸所に散見し居るといふことである。



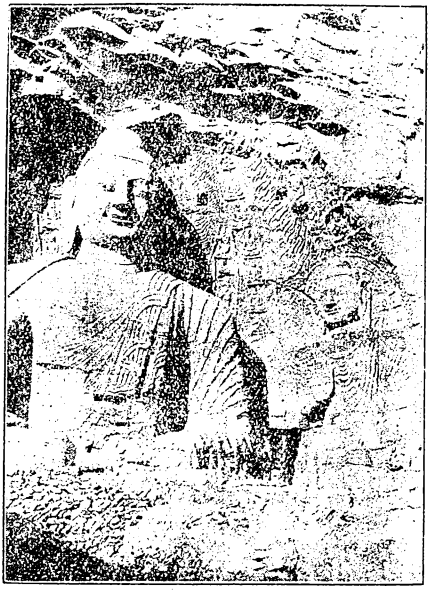
大同より歸つたのが八月卅一日、超ねて二日、九月三日には北京に最後の別を告げ、長安に向ふ。當時折惡しく京漢線不通の爲め、再び天津に出で、汝洲に下車、此に隴海線に乘換ゐ、先づ開封に至る。五日開封着。開封は宋の故都、河南省城であり、市街は繁華にして道路も宜しく、人馬馬車自由に疾驅させることが出來る。此地にあつては、宋代西より移住し來つた猶太人の部落とも稱すべき敎經胡同を尋ねたが、昔時猶太敎寺院があつたといふ趾は今は汚水の溜となり、明の正德七年に立てた尊宗道德寺記及び弘治二年の重修淸眞寺記の碑（此二は同一石の表裏兩面に刻されてある）も今は移されて同地天主敎々會の境內にある。其記す所によると、南宋の孝宗隆興元年、列微五思達なるものが始めて其寺を立て、至元十六年重ねて大刹淸眞寺を造り、明の永樂十九年重修、同二十一年趙姓を賜はり、同じく正德七年にも重ねて寺を建て、道經一部を請て二門一座を立て、又碑亭を作つたといふ。尙ほ開封では繁塔寺や、相國寺や、宋の故宮の跡をも見た。繁塔寺は五代の末、周の顯德年間に造られた天淸寺跡で、唯塔のみの殘つたものだといふ。塔は五層、高約五丈、第三層に至る迄は周圍十丈餘ありといふが、其上の部分は急に小くなり、甚だ不恰好のものである。塔內には宋の大平興國二年趙安仁の書せる金剛經、般若心經、十善業道經要略、天淸問經等の經石を壁間に嵌入してある。相國寺は北齊の天保六年の搨建で、始め建國といつたのを唐の睿宗相國寺となし、宋の至道二年に重建したといふ古刹であるが、今唐代遺物の見るべきものはない。寺內は宛も淺草觀音の如きものであるが、宋代、既に每月五吹開放萬姓交易すとあれば、其由つて來る所亦久しいものと思はれる。

九月六日午後開封發七日觀音堂着。八日觀音堂發十四日西安着。西安はいふ迄もなく唐の都で、

當時は東西十八里、南北十五里、周六十七里あつたといふが、今は僅かに其三分の一を存するのみである。今の城は唐の昭宗天祐元年新たに築く所で、昔の長安市街は遠く郊外數里の外に亘る。我邦平安朝の始、弘法や慈覺、智證等の密敎を學んだ青龍寺や、弘法の悉曇を學び、慈覺の止觀を習ひ、乃至靈仙の共に心地觀經を譯した般若の醴泉寺や、將た圓載が宜宗皇帝の敕によつて住せしめられた西明寺等の如きは、啻に支那に於ける名刹であるのみならず、又我邦佛敎に取つても最も因緣の深い寺院であるが、今や蕩然として空しく、其遺趾すらも之を尋ぬるを得ないのである。

當時の名刹で今僅かに其形の存して居るのは、唯慈恩寺と薦福寺と興善寺との三ッ位である。慈恩寺とは貞觀二十二年高宗の春宮になつた時作られた所で、彼有名な玄奘三藏が印度から回來るや、其將來する所の佛像經論は、九部の樂を奏し、綵車千五百兩を以て此に迎入れられ、玄奘亦久しく此にあつて飜譯に從事した大刹である。玄奘の滅後も此寺院は唯識法相の中心道場たるの觀があつた。酉陽雜俎には「凡十餘院、惣一千八百九十七間、勅度三百僧」とあり、又進昌坊の半以東を占めたといふを以ても其壯大なるを知るべきである。尙ほ此寺院の附近には曲江なるものがあり、長安圖志によると「曲江池、本秦時隑州、唐開元中疏鑿爲勝障、南即紫雲樓、芙蓉園、西即杏園、慈恩寺、花卉周環、烟水明媚、都人遊賞」といひ、玄宗皇帝は每年此に宴を臣僚に賜ひ、又進士の及第者にも賀宴を開かれ、進士は宴終つて後慈恩寺に至り其名を鴈塔に題したといふ。然るに今や「其深處不見底」といふ曲江も溝の如く僅かに其跡を存するのみで、紫雲樓や芙蓉園は言ふを俟たず、十餘院の大伽藍も悉く荒廢して田野となり、今日見る所は何れも前淸時代に建てられたものである。

鴈塔なるものは永徽二年玄奘が作つた所で、始めは高一百九十尺、印度窣堵波の制に倣ひ塼を表とし中を土となし、西域經像を此に置いたのであるが、塔の心内に卉木鑽出し、次第に塔を頽毀したので、長安年中更らに之を改め、東夏の制により、前よりも高くし六級三百尺となした。所が宋の代火災に罹り、明の萬曆に改修し、今日の四面七級三百餘尺のものとなつたのである。で此僅かに殘存する塔は遺憾ながら全く古の面目を失ふものといつて差支ない。次に興善寺は本と隋文帝の作る所、靖善一坊の地を占め「寺殿崇廣爲京城之最」ともいはれ、又「號曰大興佛殿、制度與大廟同」ともあるのを見ても、其壯大なるを想知ることが出來やう。是寺も隋代には那連堤耶舍、闍那堀多等の梵僧の住する所となり、特に唐代には不空三藏の據つて以て盛に密典を翻譯した道場である。唐の總章年間一度燃けたが、直ちに復舊せられ、明清時代にも屢々修繕して居たが、同治年間回人の亂に烏有に歸して了つた。今存する方丈は清朝の建立に係るもので秋毫見るに足らない。薦福寺は隋の煬帝の舊宅で、則天武后の時捨して寺となし、中宗又之を增營し、義淨の來住するに及んで譯場の中心となつた。今日見る所の建築は何れも近代



のもので、見るべきものはないが、其鴈塔のみは（勿論近くは康熙年間の修補をも經て居るが）實に唐代の遺物である。塔は十五級高三百尺、景龍年間宮人の喜捨造營する所である。今は上二層を缺き、頂上より底部に至る迄中央一直線に龜裂を生じ、甚だ奇嶮の狀態にある、のは實に惜しむべきである。尙ほ此境内には石佛坐像三尊の高各四尺計のものにして、明かに唐代の作に係ると思はるゝのが、露天に晒されてある。是れは先年革命の亂の時に殿堂佛像を破壞毀損したが爲めであるといふ。恐らく是れも久しからずして何處へか持運ばるゝことであらう。尙ほ我邦人には彼「太秦景教流行中國碑」の所在地を以て知られて居る金勝寺（隋には濟度寺といひ、唐には崇聖寺といふ）は、僅かに其門の一部を存するのであるが、是れも決して古代のものではない、而して彼碑は今や移されて長安碑林内にある。其外長安市内には寶慶寺なるものがある。是れは隋の仁壽年間に創建せられ、唐の文宗蛤蜊觀音の像に感じ、五色の塔を建てたといふ。現時存する寺の建築は見るに足らぬ、而して今其一部は小學校となり、一部は警察となつて居る。が其塔は五色ではないが明かに唐代のもので、其周圍には多くの佛龕を作つてある。其製作極めて精巧であり、唐代佛像の代表的のものとして差支ない。唯其中央一龕に宛も、西洋のアポロの半身像の如きものゝ嵌入しあるのは、余輩の最も奇怪とする所である。土人のいふ所によれば塔の製作當時より既にある所となすが、果して然るか否。是れは決して支那人の作とは思はれぬ、而も又犍陀羅佛像でもない。

長安の碑林は城の西端にあり、唐碑の一大苑叢である。特に其開成二年の石經は其十二經（十三經の中孟子を除く、孟子は今存するが、清朝になつてから賈漢復なるものゝ集字し作る所である、）

の比較的古代に成り又其完備したる點に於て現存する儒書石經中唯一無二のものであるっ碑石は間、毀損する所もあるが、其毀損の部分は碑石と相對する壁間に新たに石に刻し嵌入してある、勿論是れは明代西安の王堯典等のなす所といふ。此石經が此處に收めらるゝに至つた緣起は、元祐五年黎持なるものゝ「京兆府々學新移石經記」に詳かである。それによると京兆闔闢の間唐の國子監があり、石經は元と此にあつたのである。所が

天祐中韓建築新城、而六經石委本棄于野、至米粱時劉鄩守長安、有幕吏尹玉羽者、白經請登入城、鄩方備岐軍之侵軼、謂此非急務、王羽給之曰、一旦虜兵臨城、碎爲矢石、亦足以助賊爲虐、鄩然之、乃遷置于此、卽唐尚書省之西隅也、

が土地卑濕の爲め隨つて立つれば隨つて倒れ、奈何ともすることが出來なかつた。で北宋の末呂大忠が地を平にし家を造り、元祐二年に落成したのが即ち今の碑林の出來た始めである、それから明の成化、萬曆、清の康熙等の修治を經、更らに乾隆年間畢沅の改築したものである。で其碑石の毀損したのは主として天祐から元祐に至る約百八十年の間のことである。(勿論明の嘉靖年間にも地震の爲め石經倒損したといふ)。一々の碑の高は七八尺、其文字のある所は六尺七寸五分、幅三尺、厚約一尺で、碑面は横に八段に分ち、各段三十四行、行十字、碑の両面同じく之を刻さる。但其順序は一石の表面の終から次石の表面に續き、斯の如くにして一列に駢立せる最後の表面が終つて、次に裏面に續き、又一石より次第に第二第三石に連るのである。其刻する所の九經並びに孝經論語、爾雅、字樣等都計六十五萬二千五十二字といふ。

九月廿日長安を出で未央宮の趾を尋ぬ、咸陽を歷て唐の昭陵(太宗の墳墓)に至らんとし、同日下午咸陽に着いた所が、連日の雨によつて渭水氾濫して渡ることを得ない、で已むを得ず其日は三橋鎭に宿し、翌日長安に引歸した。昭陵に至るを得

なかつたのは遺憾であつたが、昭陵の東面西廡の壁間に嵌入してあつた太宗の愛馬六駿の石彫の中、東廡の三個は先年某外國人の爲めに取去られ、將さに其本國に送らんとし、途に長安を過ぐ、時に長安の吏之を官に沒收し、今其圖書館の廊下に陳列してあるのを見た。此圖書館には尙ほ周の大鼎や、六朝や隋の石佛の稍見るに足るものがある。

支那には至る所回々寺院を見るが、流石長安は支那に於ける其發祥地であるだけに、七箇の淸眞寺がある。唐の中宗の時始めて建てたと稱するものは、今矩模の餘り大なるものではないが（勿論當時の遺物と認めらるゝものは一も存せぬ）中には實に堂々たるものがあり、信徒數千と稱する。支那の淸眞寺は比較的淸潔ではあるが、其建築は全く支那化し、外部よりは他と殆んど區別することが出來ない。又回々敎徒も其衣食住に於ては、豚肉を食せざる外、支那人と何等の異なる所もない。而して其寺院も印度のものに比しては遙かに不潔である。

九月廿四日長安發十月一日洛陽着。洛陽は昔周公の之を開いてより、歷代の諸王亦屢々之に都した所であるが、佛敎の渡來してから晉の永嘉に至る間は、唯寺院四十二所あるのみであつた。北魏

の大和十七年都を此に遷してより、法敎劇かに盛となり、「招提櫛比寶塔駢羅、爭寫天上之姿、競摸山中之影、金刹與靈臺比高、廣殿共阿房等莊」（洛陽伽藍記卷上）ともいはれ、寺は一千三百六十七所とも稱せられ、實に盛大の極に達したのである。特に其永寧寺の如きは西域天竺未だ有らざる所、佛寺は精妙不可思議、其九層の浮屠は京師を去ること百里にして既に之を見るを得たともいふ。然るに永熙年間魏東西に分れ、孝靜都を鄴に遷してからは、諸寺僧尼も亦隨つて彼に徙り、爾來十有四年の後、武定五年楊衒之の彼に行つた時には既に「城廓崩毀宮室傾殺、寺觀灰燼、塔丘墟墻、被蒿艾巷、羅荆棘野、獸穴於荒階、山鳥巢於庭樹」といふ憐れな狀態となつた。洛陽の佛敎も亦實は蓮花一朝の夢に過ぎなかつたのである。が併し當時尙ほ四百有餘の寺院もあり、唐の之を以て東都となしてからも、多少の造營する所があつたらうと思ふ。が今や城內には殆んど一寺の見るべきものないのは、實に慨嘆に堪へない次第である。市の北端には嘗て宋の太祖の居たといふ迎恩寺なるものがあるが、是れは明の萬曆年間の創建に係るものである。

洛陽東關外に千祥庵存古閣なるものがある、是れは同光年中馬恕なるものゝ造る所であるが、此には漢碑を始め歷朝の碑碣を集めてあり、特に唐の石幢や墓誌類は頗る多く參考に資するに足る。千祥庵と相對し街道を隔てゝ河南府の中學堂がある、是れは賈誼の祠であつて、今尙ほ其像を藏する、北京に於ても嘗て文天祥の祠が小學校となり、其像のある所は物置となつて居たのを見たが、賈公の像も殆んど之と其運命を同じくするのは、實に支那國民敎育の爲めに遺憾のことゝいはなければならぬ。

十月二日洛陽を出でゝ龍門に至る。龍門は洛陽

の南二十里にあり、大同に次ぎ石佛を以て天下に鳴る名所である。昔禹の水を疏して通じたいといふ所で、兩山相對峙し、伊水其間を流るゝによつて又之を伊闕といふ。其東を香山と稱し、龍門は即ち其西である。香山の佛龕は其數龍門に及ばず、又皆唐代に成るものである。龍門の佛龕は其數一千百餘といひ、其佛像は一萬數千といふ。元と是れ北魏の都を洛陽に遷してより、大同に倣ひ造る所で、其最も初に開鑿されたのは古陽洞の石窟寺で、今之を老君洞と稱する。是れは太和十九年即ち遷都の翌々年に彫造せられたのである。之に次ぐものは賓陽洞で、舊靈巖寺といふ、即ち大同雲岡の靈巖寺に倣ふたのである。此靈巖寺は魏の宣武帝の高祖文昭皇太后の追福の爲め造らしめられたのであるが、古陽洞は民間私に聞いたものゝやうである。其後星霜を經るに從ひ次第に開鑿せられ、後には或は龍門八寺といひ、或は龍門十寺とも稱する、が洛陽伽藍記には「京南關口有名石窟寺靈巖寺」とあるから、魏の武定年間には尙ほ此二寺しかなかつたものと思はれる。但唐の時代に至つては香山、奉先の二寺が最も著はれて居たものゝやうである所を以て見ると、此兩寺は唐代に出來、それ迄には他の八寺(十寺中の)は既に衰微して居たものとも思はれる。今日にあつては龍門では唯潛溪寺即ち昔の靈巖寺あるのみであり、香山では香山寺と看經寺なるものとがある。が何れも其建築は後世のもので、餘り見るに足るものはない。

伊闕佛龕には大抵文字を刻してある、是れは大同と大に其趣を異にする點である。其長いのは香山の涅槃經、藥方洞の藥方の如きで、之を中にしては龍門奉先寺跡の大盧舍那佛龕記や古陽洞の太和七年色子像記の如きがあり、其最も短いのに至つては、何年何月誰某何佛像一軀を造るといふが

如きである。坊間では普通龍門二十品とか、五十品とか、將た五百品と稱するが、是れは固より其全部を悉くすものではない。元來此等諸山は丹厓碧嶂高く空に聳ゑ、之を攀づるにも殆ど其途がない。拓工は支那靴を穿つて迂餘曲折、巧に其間を登り去るが、それでも至る所は比較的地を去る遠からざる區域に過ぎない、其絶頂に至つては何人も蹈査を許さない。其造像銘の既に著錄せらるゝもの、多きは千四百餘通、而も未だ其寶藏を罄す能はざるものであるといふ、以て如何に其多數なかゝ知り得らるゝであらう？今之を大觀すれば其中魏造のものは十の三、唐造のものは十の七、中には高齊刻する所もあるが、隋刻は僅かに四五通に過ぎない。乃ち伊闕佛龕は魏の之を始めたものではあるが、其多數は唐代に成れるものたることは疑ない。而して隋代にば彫像の風、齊魯の間に尙ほ盛であつたが、洛陽附近では餘り行はれなかつたことも判る。

伊闕佛龕の大なるものは賓陽洞と古陽洞とを以て最とする、是等は其洞と佛像の大なるに於て大同に敵するものである。而して此両者は今に至る迄割合に能く保存せれて居る、が賓陽洞の潛溪寺は今や兵營となり、世界の珍寶とも稱すべき佛龕は或は無知なる兵士の起臥する所となり或は其炊事場となり、大佛の腰の邊りには、或は帶劍や或は銃鎗を釣下げ、其胸の邊には或は古ぼけた靴足袋や或は兵服を掛け居る如き情態で、果して能く今後完全に保存せらるゝや否疑はしいものである。其他の小龕に至つては、其佛像の既に取去られて空虛となるもの、若くは顏面手足の毀損せられ見るに堪ゑざるもの、十の七八、實に痛恨至極のことである。

龍門の佛像は前に述べた如く、北魏から唐に至る間に成れるものであるから、固より一樣に之を

論ずる譯には行かぬ。古陽洞や賓陽洞の如きは即ち其最古のものであり、其造像の形式は大同第三種のものと略相同じ但中には賓陽洞其他に於て第二種のもの（即ち魏多朝式）と、甚だ相似たものがある、此形式は隋代に至る迄支那の諸方に散見するのである。唯何れも多少形式的に陷ゐつて居ることは、其衣服の彫法抔に於て最も明かに認め得らるゝ。隋唐の諸像に至つては其形式尙ほ前者を襲踏するのもあるが、顏面圓滿の相を呈し、彫法亦甚だ老熟し來つて居る。

十月三日一度洛陽に歸り、翌四日鞏縣の石窟寺を尋ね、又白馬寺を見る。鞏縣の石窟寺は其停車場を去る西北約十里、寺は石佛寺と稱し、或は淨土寺（唐）ともいつた。石窟總べて五所、後魏景明年間に造る所といふが、其小龕に至つては唐代增彫するもので、今尙ほ開元や咸通年間の銘を認むることが出來る。此石窟は割合に善く保存せられて居るが、嘗て洛河氾濫し水に沈淪した爲めでもあらう。語石の卷二には「鞏縣濱河鄭州之役石窟寺淪於水、廠估一王姓者曾至其地云、平津著錄之西經幢及唐造象幷入於蛟龍之窟矣」とあり。如何にも其右端一窟の如きは半以上泥土に沒し、石碑の多くは土中僅かに其龍頭を顯はすのみである、が

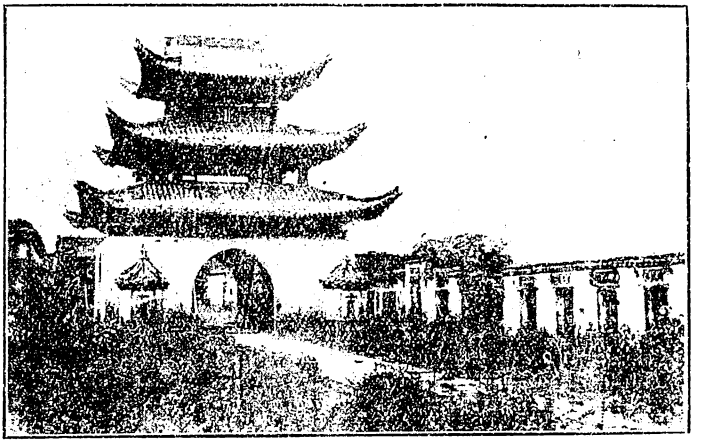
寺内には唐の大中八年尊勝陁羅尼經幢の字体甚だ美なるものが一基ある。石窟の造像は略賓陽洞のそれと形式彫法共に同じい。

白馬寺は洛陽郊外にあり、本と後漢明帝の造る所、帝の西域に經像を求めた時、白馬之を負ひ來るによつて斯く名づけだことは人の善く知る所である。寺の境内八景の一として、摩騰の墓なるものも擧げてあるが、其何處にあるか之を寺僧に聞いたが、矢張り判らなかつた。伽藍記に時に光明を放つて堂宇を照らしたといふ寺上の經函なるものも今果して何處にかある。寺の東、田野の間、十三級の浮圖があるが、是れは遼の時建つる所で、其形長安薦福寺の小雁塔に似て居る、恐らく是れは彼を模したのであらう。

十月六日洛陽登鄭州下車、此に開元寺、清眞寺を見、直ちに漢口に向ふ。漢口にあつては月湖を渡り、伯牙の琴を鼓したといふ琴臺を見、歸元寺に詣る。寺は輪奐甚だ美にして、内には五百羅漢の像もあるが、俗惡見るに足らない。寺を出て、黃鶴樓に至る、樓は長髮賊の爲めに燃かれ、黃鶴と共に樓も亦空しく、餘す所は唯其後に建つた煉瓦の俗惡なる建築のみである。樓西に石鏡亭なるものあり、西藏式の石塔で、夕陽倒に射れば炯然光を發すといふ。

仝七日夜漢口發九日南京着。南京城内に於ける明の故宮も今は既に毀たれ、唯礎石の存するのみである。此には現時古物陳列場なるもの設けられ、明代の古物を蒐集す、彼方正學が熙王に屈せず遂に其最後の血を流した時、其血の侵潤したものといふ血跡石も今は此れに收められて居る。明の孝陵は郊外、鐘山の麓にあり、形勝の地ではあるが、之を南口の明陵に比すれば、尙ほ甚だ矩模の小なるを免れぬ。南京の貢院は現時支那に存する此類唯一の遺物であらう。北京のは既に取毀たれて跡

なく、長安のは僅かに中央の明遠樓が存するのみで、其他の一部は貢院の煉瓦を利用して建てた貧民授産場となつて居る。南京の貢院は先年李鴻章の之を修繕してから、今は頗る荒廢して居るが尙ほ其全景を窺ふことが出來る



一度中央の明遠樓に上つて之を見れば、左右の両側には棟割長屋の如く、又貧民窟に似たる細長い棟が幾列にも幷行して建てられ、受撿者は各其中の一室に入れらるゝのである、其一室の大は三尺四方に高五尺計である。試驗官は其中央と場の四隅に聳ゆる高樓にあつて之を監督するのだといふ。又場の一方には試驗官の入るべき幾棟かの家屋がある。受驗者の入るべき棟は千字文の番號を附せられ、其數は總べて一萬乃至一萬五千といはるゝ。

尙ほ南京にあつては其城外四十里なる攝山の棲霞寺に就いて一言し置かなければならぬ。棲霞寺に至るには南京より上海行の汽車に乘じ、約一時間にして孤樹村に達し、此に下車するを以て最も便利とする。寺は驛を去ること約半里の處にある。本と是れ齊の永明七年明僧紹の宅を捨し、法度禪師の寺を建てたものである。唐の高祖は其名を功

德寺と改め、高宗は隱君棲霞寺となし、武宗の會昌中には一ぴ廢せられたが、宣宗の大中五年改めて妙因寺となし、宋の大平興國五年には普雲寺と稱し、仝景德五年には棲霞禪寺とし、元の元祐八年には嚴因崇報禪院又は景德棲霞寺、又は虎穴寺もいひ、明の洪武五年今の名となつたのである。寺の後庭には岩石至る所に突起し、頗る風景に富み、宛も泰山を小にしたもの、やうである、昔は僧院三十一房あつたといふが、今は悉く廢れ、唯一小院を存するのみである。境内の千佛山なるものは齊の竟陵文宣王蕭子良（武帝の子）の文惠太子豫章王等と共に刻する所と稱するが、今は殆んど全部毀損せられ、之に代ゆるに俗惡なる泥像を以てしてある。尙ほ此には明僧紹の作つた三尊石像の、中尊高四丈、左右觀音勢至各三丈のものや、仝じく隋代の作、引接二佛の顏貌衣縷の顧愷之の筆法なりと稱せらるゝものもあつたやうであるが今は孰れも見るを得ない。唯隋の文帝の造つた五級の舍利石塔のみが寺殿の後方に殘つて居る。塔は八面にして、白石を磨して造る所。中央には四天王の像を刻し、上には天女の飛遊するあり、臺石に近き處には佛の降誕より涅槃に至る一代事蹟を彫す、彫刻精巧、實に隋代造像の絶品と稱するも差支ない。彫法は署龍門陽賓洞等の入口に存する諸人行列の圖に肖たるが、巖石の如きは線を以て其筆力を顯はすこと、宋以來の畫に於て見る所と同じである。世間では唐以前の畫は悉く細線を以て描出されてある如く思はれて居るが、今此圖を見れば隋代既に此の如きの描法の存したことが判る。で是れは支那美術史の上にあつても實に吾人の注意すべき一製作であると思ふ。

十月十日夜南京發十一日上海着。午後蘇州に至り寒山寺、西園戒幽寺、劉園等を見、十二日上海發十六日京都に着す。今回の行は出發前の豫定に

後くるゝこと約三週日に亟んとしたので、已むを得ず南方支那の游覽は極めて粗となり、特に廬山、天臺、杭州、寧波等、我邦佛敎と頗る密接な關係を有する地方に歷游し得なかつたのは、余輩の最も遺憾とする所であるが、是れは爻他日の機會を俟つことゝする。

君府の思ひ出

文學博士　坂口昂

三、君府の名稱

天下の王城としての君府の概觀を諸君の眼前に展開したあとで、私は茲に特に名稱の上から、同やうに、如何にそれが世界の帝都らしきかを語つて見やう。

今のコンスタンチノープルの主要部は、諸君の知れる如く、名づけてスタンブールと呼ばれて居る。この名稱が果して何に由來するかは頗る興味ある問題であるが、これは後廻はしとして、先づ古き名稱ビザンチオンから說かなければならぬ。

スタンブールそれ自らは金角灣と大理石海（マルモラ）との間に於て牛渡海峽（ボスフォロス）の入口に向つて東方に突出した一個の三角形の小半島である。その尖端は地勢やゝ北に曲りてセライ岬 Serai Point となる、即ち古のボスフォリス・アクラである。今は此尖端の內面に於ける海岸線が泥沙に埋もれたる故にや、やゝ鈍狀を成して居るが、ともかくこの突出は金灣灣內の港を抱いて、古今を通じて無比の良泊をしつらへて居る。この鼻の高地に、古の希臘人がまだ來住しなかつた時、古トラキヤ族が棲みて自已